

名倉コレクション—ある貝類愛好家と貝類を取り巻く人びととの交流の証— 佐藤武宏 (学芸員)

それは突然の電話からはじまった

2012年1月のことです。菌類ボランティアの滝田睦夫さんという方から電話が入りました。横浜市にお住まいの貝類愛好家、名倉菊江さんが貝殻標本の寄贈を検討しているというのです。連絡先を伺って名倉さんに電話をかけ、2週間後にお宅を訪問する約束をしました。名倉コレクションの受贈の話は、こうしてはじまったのです。

名倉さんのお話

このコレクションは、名倉さんが昭和時代の後半に、今は北九州市にお住まいのご令嬢、江口瑞枝さんとともに収集し、ご自宅で管理してきたものでした。ご主人がハンドルを握って採集行脚をしたり、家族総出で標本製作をしたり、名倉さんの言葉を借りれば『一時は名倉家は貝



図1 名倉さんのご自宅での保管の様子。



図2 標本小箱が収められた標本筆筒の抽斗。



図3 大山桂先生が同定保証の印にいられたリボン片(左上)。

一色の生活をしてきたようなもの』だったそうなのです。

しかし、名倉さんは、自分が家族とともに収集した標本が散逸してしまうことや、この先ご家族に負担が掛かることを心配していました。『コレクションをまとめたまま博物館に収めることができるなら……、しかも自分が長く暮らした横浜や、沢山の標本を集めた三浦半島や相模湾に縁のある博物館なら……』優しく、しかし芯のある言葉に、思わず襟を正しました。

名倉コレクションを一目見て

概要を把握するため、まずコレクション全体を拝見しました。大きく見栄えのする一部の標本は応接間に飾られていたが、ほとんどの標本は標本筆筒にまとめて保管されていました(図1)。標本筆筒の抽斗には、綿敷きの上に貝殻標本が収められたプラスチック製の標本小箱が隙間なく並べられていました(図2)。微小貝と通称される小型種の貝殻標本は、ガラス製の標本小瓶に収められ、一回り小さな標本筆筒に保管されていました。標本の管理状況も良く、貝類全般を網羅的に収集しており、ラベルも添付され、一目見てこのコレクションはかなり価値の高いものだと思えました。

いくつかの標本小箱にはなぜか縦5ミリメートルほどの小さなフランスの国旗が入っていました(図3)。これは何ですかと伺ったところ、名倉さんは笑いながらその正体を明かしてくれました。実はこのコレクションには、著名な貝類学者である大山桂先生が目を通していました。大山先生は標本を精査し、同定(生物の分類学的な所属や名称を明らかにすること)を保証したものにはその印としてリボンを小さく切ったものを入れていたのです。些事にとらわれぬ人柄で知られる大山先生は、どうやらその時手元にあった洋菓子のリボンを小さく切って印として使っていたようです。たまたま最初に気がついたのが青白赤のトリコロールのリボンだっただ

けで、量はずっと少ないものの赤やピンクのリボンなども使われていました。いずれにしても、大山先生が同定を保証しているということが、このコレクションの学術的価値を著しく高めています。

こんなコレクションは

もう手に入らないかもしれない

このコレクションを是非受贈したい、という気持ちは固まりました。理由の一つはもちろん、当博物館を指名してくれた名倉さんのご厚志にお応えしたいという道義的なものでした。そして理由は、実はもう一つありました。それは、このようなコレクションは、今回の機会を逃すと二度と手に入らないかもしれないと考えたからです。

かつて盛んにおこなわれた貝殻収集ですが、最近では貝類愛好家の数もずいぶん減りました。情報技術が発達し、あらゆる情報を集めたり、世界中のコレクターやディーラーと直接やり取りができるようになった一方で、水産業の近代化や効率化によってこれまで漁港に持ち帰られてきた混獲物は少なくなり、漁業者の好意に基づいて自分自身の手で混獲物の中から目ぼしいものを選び出す、ということもしにくくなりました。埋め立てや護岸は身近な貝類の生息場所を激減させました。科学技術の進歩にともなって、貝類分類学の基軸はDNA解析などに代表される分子生物学に移りつつあり、趣味の貝殻収集と専門の学問との間に距離が感じられるようになってきたのかもしれない。愛好家が少なくなると市場も縮小していくのは経済学の道理です。代替わりをきっかけに看板を下ろしたり、扱っ品を別のものに替えてしまったりしたディーラーも少なくないと聞きます。

お話を聞くうちに

何度か名倉さんのお宅を訪問し、お話を伺っていくうちに、いろいろなことがわかってきました。

はじめ、コレクションは貝類全体を網羅

的に収集したものだと思っていました。確かに名倉さんは最初は種類の充実を目標としていたそうです。それに加えてご令嬢の江口さんは、当時東京大学で教鞭を執っていた堀越増興先生に師事し、クダマキガイやトウガタガイなどいわゆる微小貝を集中的に収集していました。

また、コレクションの中身は貝殻標本だけではありませんでした。顕微鏡観察に基づくスケッチ類や、貝類の生態写真も含まれていたのです。今でこそ多くのダイバーが沢山の水中生態写真を撮影していますが、当時は水中写真は極めて特殊なものでした。名倉さんのご主人は写真家で、水中写真が一般的でなかった時代に水槽を使用した写真撮影法を自ら編み出し、タカラガイやウミウサギをはじめとする美しい貝類の生態写真を多数撮影していました。これらの写真は日本貝類学会が一般向けに開催した展示会でも使用され、貝類の色彩や模様的美しさを伝えるのに大きな貢献をしたそうです。

そして、名倉さんから当時のお話を聞いていると、その中に多くの貝類研究者のお名前が出てくるのにも驚かされました。とりわけ何度も話題に上ったのは、先述の大山桂、堀越増興のほか、山口正士、櫻井欽一、池田 等などの先生がたです。お話や標本ラベルから、名倉さん母娘が多くの方がたと交流し、標本を交換したりしていたこと、名倉家がまるで貝類を愛する人びとのサロンの存在であったことなどを伺い知ることができました。

名倉コレクションは、まとまったコレクションとしての価値や、学術的な価値のみならず、貝類学を取り巻く当時の人びとの交流の証という科学史、文化史的な価値からも見逃せないものである、ということがわかってきたのです。

受贈までの道のり

受贈の方針が決まると、さっそくコレクションの移動に取りかかりました。貝化石が専門で貝殻の扱いに長けている学芸員の田口公則の協力はまさに百人力でした。資料の保護や梱包といった準備を経て、ついにコレクションが博物館にやっ

てきました。

もともと、これはスタートラインに過ぎませんでした。受贈にあたっては、コレクションの概要を説明する内容書とコレクションを構成する物品のリストを作成し、寄贈者と受贈者の間で書類を取り交わさなければなりません。大きなコレクションでは、物品のリストを作成することがまず最初の大きなハードルになることは、どの分野にも共通していることです。

しかし、正確性を極端に追求するあまりリストの作成に時間がかかり過ぎ、正式な受贈までに長い時間がかかっていたのは、寄贈者に対しても申し訳が立ちません。そこで、ボランティアの永井高磨代さんと西本志保子さんに協力してもらい、仮に名前がわからないものがあったとしてもとにかくどの標本であるかが特定できるだけの最低限のリストを作成しようと決めたのです。1年を超える時間を費やし、ようやく一応のリストが完成しました。これにより、7,000に迫る件数の標本、50点を超える図鑑などの書籍、写真や自筆スケッチ一式、文献の複写一式からコレクションが構成されている、ということを確認できました。

最後に事務的な手続きを経て名倉コレクションは晴れて博物館の資料に加わりました。最初の1本の電話から丸2年が経っていました。

2014年3月には、名倉さんのお宅を訪問してこれまでの道のりを報告し、当博物館副館長の吉田 弘によって、神奈川県知事黒岩祐治からの感謝状が名倉さんご本人に手渡されました。

コレクションと博物館

名倉コレクション受贈の事務的な手続きは完璧に終了しました。しかし、博物館としてなすべきことがこれで終わったわけ

ではありません。

貝殻標本の多くは、綿や紙のラベルとともに標本小箱やコルク栓つきの標本瓶に入れられて、木製の標本筆筒の抽斗に収められていました。今は問題がないとはいえ、木や綿や紙は長い間には分解して酸性のガスを生成し、標本を腐蝕する可能性があります。これを避けるため、博物館では標本ラベルや標本番号タグと標本そのものを別々の樹脂製の袋に入れた上で全体を一回り大きな樹脂製の袋に入れ、それらを樹脂製のコンテナにまとめ(図4)、金属製の標本棚に配架しています。入れ替えにあたっては、標本一点一点に固有の登録番号を付与し、標本に関連する採集情報などのデータを電子的に記録する登録作業を行います。これはとても地道で手間のかかる作業で、永井さんや西本さんをはじめボランティアのみなさまの協力無くしてできるものではありません。

コレクションを展示したり、紹介したりすることも寄贈者のご厚志に応える一つの方法であり、コレクションの利用の一つのかたちです。しかし、それに先立って標本を安全な状態で保管し、記録された付随情報を整理し、誰でも利用できるように登録することこそが、コレクションを受贈した博物館のまず最初の義務なのです。

博物館の数ある役目の中には、展示を通じて広く自然の面白さを伝える、多くの人に資料を見てもらう、ということが含まれます。そのため、どれだけ多くのお客さまを展示室にお迎えしたか、という数字だけがとかく注目されがちです。しかし、コレクションをはじめ特筆すべき資料を収蔵し管理する、ということは、パピリオンやギャラリーやホールとは違う博物館ならではの最も重要な使命の一つです。名倉コレクションは学術的な価値はもちろん、貝類を取り巻く人びとの交流の証という価値を持つ、他に代え難い貴重なコレクションです。この名倉コレクションの受贈の顛末は、博物館活動が多くの人のつながりと資料の集積によって支えられているということを、改めて心に深く刻みかけとなりました。



図4 樹脂製保管容器を利用した博物館での保管の様子。